

情報処理能力育成と教育の質保証の関係（2）

The relations of the quality guarantee of ability for information processing upbringing and the education（2）

金山 茂雄
Shigeo KANAYAMA
拓殖大学商学部

Faculty of Commerce, Takushoku University
Email: skanaya@ner.takushoku-u.ac.jp

あらまし：情報社会にとって極めて重要なことは、ITによる技術革新後、様々な問題に直面し解決ができないことである。特に、情報化は社会や人に対する影響が個人の日常生活に至るまで及んでいる。情報が空気のように社会に蔓延している今では、情報の過剰負荷に伴う、自己防衛や退避症候群が行われていると考えられる。このことに対し、ある調査を実施し、その結果から「ITの活用と情報環境」の変化など、特に自己防衛や退避症候群の実態と状況等についてはじめに報告する。そして、高度な技術が世の中に普及し技術の飛躍的向上と共にコンピュータの利用が教育に及んだ。その結果、常にそのあり方を考える必要性が生じたのである。現代の若者にはコンピュータやその関連する道具を利用する機会が今後増えると考えられる。二つ目として、前回に続き「情報の処理能力と質の保証について」若干の現状の報告と提言も行いたい。

キーワード：教育の情報化と最適環境 過剰負荷現象 退避症候群 URAとプロジェクト組織

1. はじめに

世界は、経済面でも「光」と「影」の格差が生じ「明」と「暗」、「勝ち組」と「負け組」など二分化している。その中で情報社会は人間の知的な活動領域を拓げ、お互いの競争を通じて個人の能力を伸ばす。個人の能力の強化は、企業や国家、家庭の価値や社会倫理の後退を招く結果へと進んでいる。教育等高等機関も同様なことが言える。

経済の発展は、情報社会にとって重要なものである。情報が空気のように社会に蔓延している現代では、情報の過剰負荷に伴う、自己防衛や退避症候群が行われていると考えられる。これに対し、2005年からある調査を実施し、その結果から自己防衛や退避症候群の実態と状況等が分かりつつある。さらに、個人と社会の関係には、必要なコミュニケーションが必要である。最近の傾向では、コミュニケーションが以前より少ない。それは退避症候群に観られる情報を避けているからだと推察できる。また、コミュニケーションの欠如とも言える。「ITの活用と情報環境」に関する調査などの結果から「ITの活用と情報環境」の変化など、特に自己防衛や退避症候群の実態と状況等についてはじめに報告する。

次に、2005年度と2006年度などに実施した調査とプロジェクト組織形成の可能性も含みながら、「質の保証」とその保証のための能性的組織形成の実現性に関し報告する。つまり、プロジェクト組織形成→能性的組織形成→“URA”なのか、検証を試みる。

2. 情報の処理と能力向上への期待

現代の若者はこれからもコンピュータやその関連

する道具を利用する機会が増えると推測される。今回は、社会と人間関係に的を当て、個人の存在と集団、さらに社会との関わりの中で個人のおかれている状況を把握（自己分析）するために、調査を実施し、その結果と前回までの関連性に関し、前回報告した。そのなかで「プロジェクト組織形成の可能性」に関し、結論的ではあるが、大学・高等教育機関や高等学校、特に、義務教育機関である小中学校には、いち早く「多機能性のあるプロジェクト組織」が必要である。それは、多様な社会、複雑化社会、様々な国の人たちといった項目と内容が挙げられる。もちろん、その国家のルールはあるが国際化となると国家のルールが変わる。いろいろな地域でいろいろなことが毎日起き、その対応に追われる社会なのである。

企業事例として、企業の組織では、ある時期にタテの関係からヨコの関係へシフトし、その後マトリックスに変わった。この変化は社会も同じと考えて捉えられる。なぜなら、人の集まりが組織であり、また社会であるからだ。情報社会は人間の知的な活動領域を拓げ、また人間はお互いの競争を通じて個人の能力を伸ばし、その結果たくさんの産業が生まれた。大学等高等教育機関では社会で活躍し、あるいは貢献できる人材の育成に対し責任がある。そして大学が学生に対して「質の保証」は絶対的な重要なことである。

大学の目的は「学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させること」(学校教育法第52条)である。日本の大学は諸外国の大学に

比べても評価は必ずしも高くない。大学教育に対し高度の実践的能力を有することか、それとも高い倫理観を持つことか、学術を究めるのか、その方向性と評価は様々である。学術研究の高度化と人材養成、社会の期待に適切に応えることが新しい大学像などであると評価され、また就職率の高さであろう。よって、大学教育において広範囲な枠で情報教育を実施する必要がある。一般論として、大学における情報教育は社会変化と共に流動的で、教育モデルも同様である。さらに、情報教育の基盤となるコンピュータサイエンスの基礎を十分に把握し理解させることが重要かつ目標となるだろう。

21世紀に入り、世界は経済的側面が二分化した状況に陥っている。企業社会では、「勝ち組」と「負け組」である。二分化された状況であっても人間の知的な活動領域は止まらず拡大へ進んでいく。ライバル企業同士はお互いの競争を通じて個人の能力を伸ばすだろう。しかし、知的活動の競争が、情報を増加させ情報の過剰負荷に伴う、自己防衛や退避症候群が行われていると考えられる。この仮説に対する検証のために、2005年からある調査を実施し、その結果から自己防衛や退避症候群の実態と状況等が分かりつつある。個人と社会の関係には、必要なコミュニケーションが必要であり、コミュニケーションが従来よりも少ない。それは退避症候群に観られる情報を避けているからだと推察できる。また、コミュニケーションの欠如とも言えるだろう。

3. 現実と近未来的な教育の幻想

社会では、ITの社会現象としてインターネットの利便性がいわれている。一つは、インターネットは簡単に情報の受発信ができその反面、犯罪などに使われることがある。特に、インターネットの掲示板に人を恐怖に陥る行為を平気で書き込んでいる。インターネットの社会の病を映し出しているようにも思える。次に、電子メールや携帯電話の普及により、個人と個人の関係が強くなっている。電子メールや携帯電話がなかった時代は、友達と話す際、一度、家に電話しないといけなかった。しかし、今は直接相手に電話し、話をする。個人とその個人の周りとの関係があった。家族と個人とのつながりが細くなっている。三つは、インターネットの普及により、文章を気軽にやり取りできることは、「インターネットのすばらしさ」を表している。従来のメディアは情報が一方通行で常に受け身状態であった。しかし、誰でも情報の発信者になれる。しかし、情報の発信者としての責任がある。各自が責任への自覚をもたない時は、法的な「規制への動き」になる。「言論人の倫理的な姿勢が極めて重要だ」と同様に「インターネットの利用と方法」は重要である。これは、制度のことであるが情報社会の核となる「インターネット」の利活用の重要性を示している。また、「情報」の利活用の姿勢についても述べている。社会環

境の変化の代表は、IT、特にインターネットに象徴され、その影響は個、集団、文化、習慣、そして、価値も変わった。また、電子商取引・eコマース、ネットショッピングでみられる「モノから情報へ」の変化は大きく、ITによる労働や自己改革の必要性、想像・論理・集中・直感が欠けている。そして、技術進歩の結果は、ネット中毒、学習障害、人と接するのが苦手。さらに、ストレスは、感情の変化とともに生活のスタイルも大きく変えた。ここで考えられる問題は、知覚体系への影響とその度合い、様々な事柄から学習しない傾向やモノの意味・価値観も変わったであろう。そして、自己実現への意識が欠けている。このように、教育の重要性の再認識とその行動計画の必要性が示されている。

4. まとめ

現代の社会問題のひとつに「未就労者の急増」が挙げられる。未就労者（一般的にニートと呼んでいる）など定職に就けない者は、学校時代に部活動、サークル活動など課外活動に消極的で友人が少なく外出もあまりしない。これは、読売新聞社が実施した「若者の生活と仕事の調査」で分かった。社会とのつながりが希薄なことがニートを生む原因とする関係者の見方を裏付けているようである。学力と家庭環境には特に問題がないと報告している。独自の調査では、①友達が多くない。②部屋にこもる。③インターネットに親しむ。④気ままな生活、などの傾向がある。この調査は「情報倫理に関する調査」である。インターネットの利用時間が長く、夢中になる傾向があり、「インターネット中毒」「ネット依存症」と言われている症状が現れているようである。

以上のことは、学校教育の各段階において何らかの問題が発生していることが分かる。以前から指摘しているように「情報倫理に関する調査」による傾向は「未就労者」の特徴と同様な部分があり、共通性があることに注視しなければならない。以前から実施している調査では、他人との接触と関わり（コミュニケーション）を避ける傾向と不安からの回避も見られる点は「未就労者」との整合性があると推察できる。その要因の一つに性格的な一面がありそうである。

参考文献

- (1) 金山,窪田,小林「情報処理能力育成と教育の質保証との関係」教育システム情報学会全国大会.2011年.
- (2) 金山「知覚に関する情報処理環境の変化と意識」PC利用技術学会全国大会,2005年.
- (3) 窪田,金山「情報化と教育環境の影響分析」教育システム情報学会全国大会,2009年.
- (4) 金山「情報メディア産業のビジネスモデル調査・分析」拓殖大学経営経理研究所11月定例会,拓殖大学経営経理研究所,2005年.
- (5) 金山「情報通信と情報技術の史的展開」拓殖大学経営経理研究所第79号,2006年.